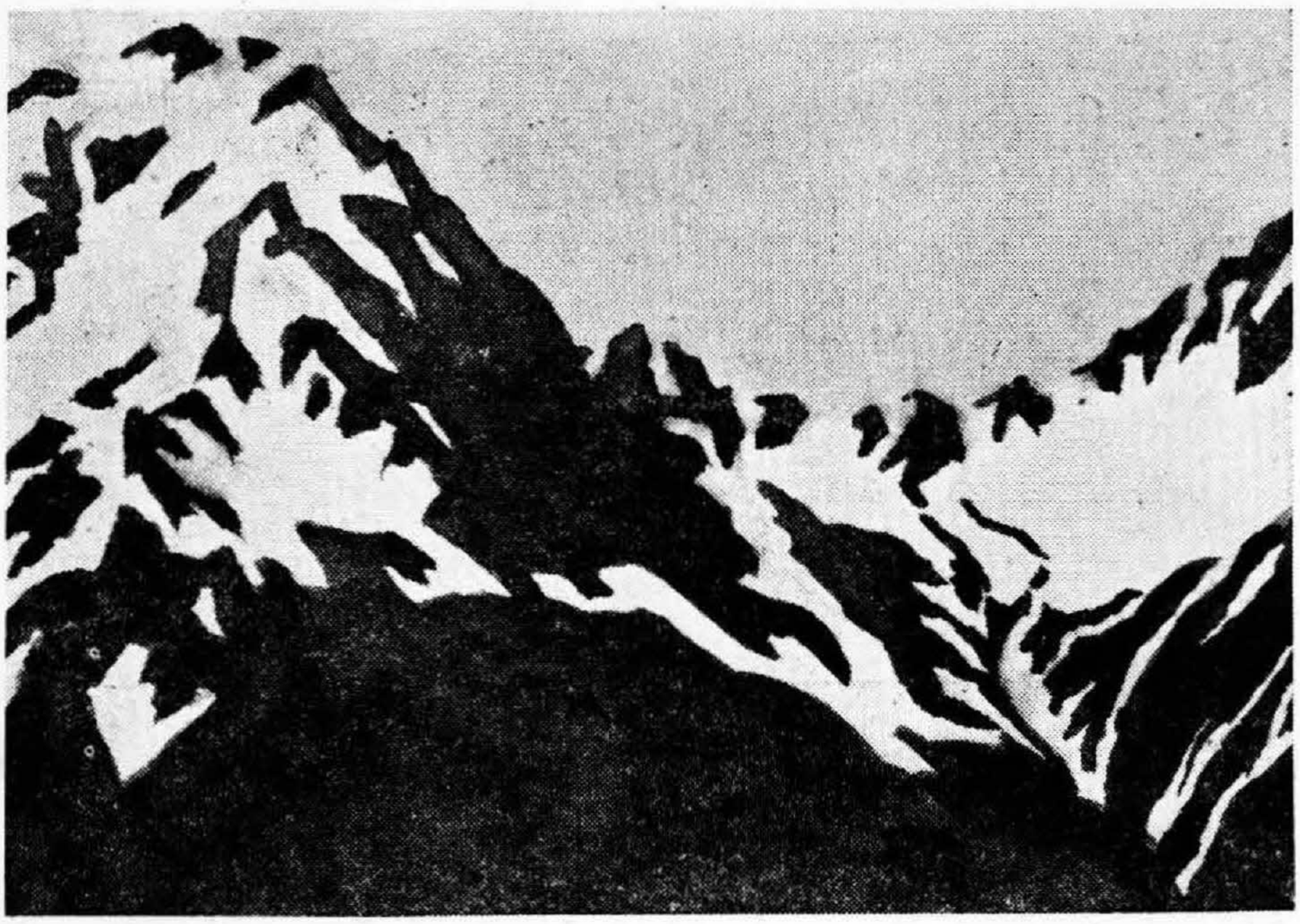

針葉樹會報
通卷第七十二號

針葉樹會十年史稿（三）

增山清太郎

（五）

先に述べたやうに針葉樹會はその始、毎日集る一の集會に過ぎず、團體と稱すべきものではなかつた。針葉樹會といふ名前が付いても、その點に變りはなかつたが、元來一橋山岳部といふ、確りした團體を組織してゐた者が、毎月日を定めて會合を催す。日を經、月を過すに從つて、次第に團體意識といふやうなものを生じて、針葉樹會は一の團體へと進化して行つた。そして昭和五年三月の例會の席上、數人の先輩がゴツ〳〵話してゐると思つたらば、吾々の前に、今日在るやうな規約を示された。此の日を期して會の組織は明瞭になり、新に會報を發行することになつて、格段の發展を遂げたのであつた。

規約は素より一片の口約に過ぎない。決して文字に書いたものではないけれども、假に世間に行はれるやうな體裁に書いてみると、次のやうになる。

針葉樹會規約

第一條　本會ハ針葉樹會ト稱ス

第二條　本會ノ目的ハ會員及ビ一橋山岳部員相互間ノ親交ヲ增進スルニアリ

第三條　一橋山岳部出身者及ビ一橋山岳部員中ノ有志者ヲ以テ本會々員トナス

第四條　一橋山岳部員ハ總テ會員ト同等ノ資格ヲ有ス

第五條　會員ヲ別チテ在京會員及ビ地方會員トシ在京會員ヨリハ年額六圓、地方會員ヨリハ年額參圓ノ會費ヲ徵收ス但シ在京會員地方會員ノ別ハ會員各自任意ニ定ムルモノトス

第六條　第二條ノ目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ行フ

一、定期的ニ會報ヲ發行ス

二、毎月例會ヲ催シ其他必要ニ應ジテ各種ノ會合ヲ開ク
三、其他會員ニ於テ必要ト認ムル事業ヲ行フ
第七條　本會ニ幹事二名ヲ置ク
第八條　編輯幹事ハ會報ノ編輯及ビ發行ヲ司リ會計幹事ハ會計、集會及ビ庶務ヲ司ル
第九條　會費ヲ納入セザル會員ハ會員集會ノ決議ニヨリ除名スルコトアルヘシ
以上

もとより不備不完全なものであるが、その後少しの故障もなく今日迄行はれてゐる。但し第二條は人に依つて異つた解釋を持つであらう。

初代の編輯幹事は松木氏で、以後手塚・小川・園山・山口・増山・柿原の諸氏が歴任した。會報第一號は同年五月に謄寫版で發行され冒頭に近藤・村尾兩氏の論爭的漫談を載せ、以下感想・近況報告・紀行といふやうなものを入れ、尋いで部室欄と消息・記錄に相當の重要さを認めてゐる。第二號以下はそれ〴〵七月、九月、十一月、十二月に發行され、以後月刊となつた。第六卷第四號（昭和十年五月發行）からは活版となつた。名稱は始め「針葉樹」であつたが、一橋山岳部發行の針葉樹と混同し易いので、第三號を「會誌」と、第四號以降を「會報」と改めた。

部室欄は云ふ迄もなく部の近況を會員に知らせる爲のもので、磯野・増山・中島の順で執筆したが、その後「一橋山岳部報」を發行して、針葉樹會員にも配ることゝなつたので、自然打切りとなつた。一橋山岳部報は昭和五年秋に本科が國立に移轉して、本科・豫科の連絡が甚だ困難になつたので、故中島氏の發議により發行したもので、その由來は同氏の筆になる第二號卷頭言に詳しい。處が昭和七年に一橋會の赤字問題に端を發して、財政上部報發行が不可能に陷つたので、針葉樹會報に合併し、第二十號からは、會報には再び山岳部の近況を載せることゝなつた。

今、七十册の會報を机上に繰展げて見ると、八年間の回想、興味津々として盡きないものがある。針葉樹會そのものが、始めから七面倒腐い理屈を抜きにして、唯集ひ語らつたのが、自ら會員の欲する所に從つて今日に發展したのだ。會報とてもその例に漏れず、眞に自然に、會員の要望に副ひつゝ進んで來た。その發展の跡は、その變遷は、極めてなだらかであり、人爲的でない。俗に謂ふ第一期、第二期といふやうな言葉を以て律する事は出來ない。が、いまその變遷を慨觀するに、まづ最初の頃は、創刊號に就て述べたやうに、消息・記錄・感想などに主力を注いでゐた。換言すれば會員個人の生活を、全般に報告するのを主たる目的とした。ついで盛になつたのは、漫文的な、滑稽な内容を備へたもので、これは一部の會員をひどく喜ばせたらしいが、國立の部室では評判がよくなかつた。特に第五號の「良書紹介」、第六號の「消息」の或る部分などは「針葉樹會報も悪くなつたね」といふ言葉を以て酬ひられたと記憶する。ついで紀行の全盛時代、次に活版刷と同時に表はれた研究もの、賑はつた時。

會報の内容は斯くあるべし、といふことは出來ないが、その使命は、最初に力瘤を入れた消息・感想方面、再び云ふ、會員の生活の發表に在ると、筆者は私かに信じてゐる。體裁の進歩と共に記事が畏こまつて、勿體ぶつて、しかもやゝ長篇のもの二三を載

せるに過ぎなくなつたのは、會報の使命から見て大きな退歩である。諸君は初期の會報に、ほんの數行から成る、無題のしかゝ頗る意味深い言葉を數多く見るであらう。あれが會報中での壓卷だ。

嘗て東京商科大學は、經濟、法、商學研究に并行して、雜誌「大學と社會」の刊行を企てた。これは企業的には全然失敗して、數回で休刊したが、それが永續したのが針葉樹に對する針葉樹會報である。今や針葉樹が、大學山岳部の發表機關としての形態を着々整へつゝあるに反し、會報が今日の狀態に在るのは、非常に殘念に思ふ。

會計幹事は初代は近藤氏、尋いで金田●園山●鈴木●吉澤(松)小柳●新羅の諸氏が歷任し、會費の徵集、例會の通知を始め、煩雜な事務の遂行に當つてゐる。茲に特記すべきは近藤氏が幹事退任の後と雖も、會費徵收のために全幅の努力を盡してゐることである。閻魔帖を常に懷中して、會員の顏さへ見れば、帖と對照の上催促に及ぶ。爲に地方會員にして上京の序に、この厄に會ふものその數を知らず、在京會員にして恭々しく幹事の私宅に伺候して支拂ひしもあり、本會が「勘定合つて金足らず」の災に罹らぬもの、實に氏の努力の賜である。氏のこの閻魔帖を愛することの何物にも過ぎ、中川氏の言葉を借りれば、「後家さんが貯金帖を愛撫する」如くである。憶うに、氏が「東京を去るの辭」に述べられた感謝の氣持から、この誰も嫌がる役を買つて出たものであらう。誠に會員の一人として畏敬の念を禁じ得ない。

話は再び前に戻る。規約第五條但書に「在京會員●地方會員ノ別ハ會員各自任意ニ定ムルモノトス」とある意味を說明して置かう。規約を定めた席には、吉澤氏が勿論居合せたが、氏は遠からず大阪に轉任になる豫定であつた。そこで熊氏曰く、「俺は在京會員だらうか、地方會員だらうか?」。會員一同期せずして答へた。「それは熊さんの良心に決めて貰はうぢやないか」と。これを成文化して前の如くに記したのである。

處で諸君! この時熊さんは六圓拂つたでせうか。三圓拂つたでせうか。近藤監査役に賴んで調査して貰はうではありませんか。後日彼氏百歲の後、傳記を書く段取りともなれば、この事は氏の人格を稱揚するための大きな資料となることですから。

その後も東京在住の地方會員もあり、地方にも在京會員があることを記して置く。

規約第三條に依つて、學生時代から針葉樹會に入會した人は無いやうである。また規約には規定しなかつたが、會員は自己の意志のみを以て自由に退會し得る慣習となつてゐる。

近藤さんの初手紙 (吉澤一郎氏宛)

吉澤兄

到々九州へ來てしまつたよ。昨日から引越荷物の片附けで大騷ぎだ。漸く本日一應片附けた。今手紙を書いて居る二階の窓から雲仙岳が手にとる樣に見える。見晴しは先ず八〇點と言ふ處(但し大牟田市として)ですし、市の高臺にあるせいか餘り煙も來ず子供の健康には良い場所ですよ。是から幾年の間か雲仙嶽丈見て暮さねばならぬかと思ふと、一寸閉口ですね。

明日から各事務所を挨拶して廻らねばなりません。先づ早くて

三日間はかゝりませう。染料丈でまる一日掛りませう。こんな仕事はいやな仕事ですよ。「相手變れど主變らず」とは何處かの夜店の口上でしたが、全く是れですかられ。首筋の痛くなる位「オヂギ」をせねばなりませんよ。

僕の斗慮では三ヶ月位は工場見學をするつもりでゐましたが、課長が許して呉れません。今にも仕事をして貰ひ度い口振りですので、例の通りむら〳〵として、そんな約束はした覺はない、所長に聞いて見ろと言つた處、課長さん急に折れて、毎日一定時間の見學を許してくれると云ふ話でしたので、腹の虫を治めると云ふ段取りですし、何んでも初めが大切ですかられ。我儘承知で九州へ引張つたのですから、是位は當り前ですよ。

然し仕事は相當急がしいらしいですが、忙しければ忙しい程ゆつくりとやつて見るつもりで居ります。まゝ九州も東京に比れば暖いし住めそうですよ。取柄は暖かい點位ですよ。針葉樹會員諸兄によろしく。では又書きませう。

恒雄

赤城懇親スキー行

S

日時　一月廿二日夜淺草雷門發、廿三日歸京

參加者　吉澤、村尾、增山、小柳、新羅、(現役) 森川、佐々木、岩崎、山田、小泉、久保

一月二十二日の夜九時半電車が動き出した時は全部で何人來てゐるのか分らない位の滿員でこれが皆行くのかと思ふとがつかりした。今年は例年よりスキーをやる人は少いかも知れないなんて思つてたのは間違ひで行く人はやつぱり行くらしい。

身動きもせずうつら〳〵と眠つたり起きたりして新伊勢佐木に止つたのが夜中の一時頃。メムバーはクマさん、ペンちやんを始め增山、新羅、現役から森川、佐々木、岩崎、小泉、久保、山田の十名、バスの出る四時半頃迄眠いやら寒いやらで變な氣持だつた。順番を待つて大型のバスに乘り薄明るくなつた頃箕輪着。思つたより雪は少く天氣は曇つてる。峠を越えて赤城旅館着が九時頃。前日より滯在せる小柳氏の部屋で一服。最近ちつとも降らないのでゲレンデはパン〳〵だ。天氣が段々よくなつてて來たので腹を造つてから地藏へ向けて出發。急な處をスキーを擔いで強引に上る。中腹で一休み。一年生の人は仲々うまい。さてもEight があつて伸びさうだ。岩崎も非常にスムースに滑る。記念寫眞を撮つたり眺めたり。谷川、武尊等よく見えた。頂上で晝飯を食ふ。それからクマさんが採點者となり一人一人滑らせては點をつける。皆二點三點から五、六點迄。ペンちやんは四點、小柳氏は七點。愈々クマさんの番で白いワイシャツにネクタイを棚引かせ乍ら得意のクリスチヤニア、シユナイダーも斯く許りと見てゐると、どうしたものか腰が定らないで止るべき所に止り切れず遂にブツシュの中まで滑り込む。どう見てもこれぢや四點か良くて五點だ。雪が悪かつたので調子が出なかつたのかも知れない。森川はもつと上手でも決して不思議ぢやなからう。佐々木亦然り。

一時二十分頃降り始める。赤城の粉雪なんて誰が云つたのだらう。一面のザラ〳〵雪。大して快的ぢやない。

ゲレンデで一頻り練習。三時頃出發、峠からのヂグザッグは人

間が澤山ゐて危くて仕方がない。三時半頃順々に箕輪着。又長い道をバスにゆられて六時前に新伊勢佐木に着き皆一緒になつて電車に乗る。行き程込んでゐなかつたので樂だつた。雷門着九時半樂しい一日のスキー行だつた。

エヴエレストにて發見された氷斧（一）

F・S・スマイス

（一九三三年の第四回エヴエレスト遠征の時である。五月三十日第六キャムプを出發して第一回の攻撃を企てた Wyn Harris, Wager の二人は、偶然にも一本の氷斧を發見した。一九二四年第三回の遠征に際して Mallory と Irvine とは絶巓へ向つたまゝ、不歸の客となつたことは余りにも有名であるが、この氷斧は疑ひもなく其の時二人の中の何れかゞ殘していつたものである。以下に譯出したのは此の氷斧に對するスマイスの推定である。）

× × ×

一九三三年の遠征時、第六キャムプ（27,400ft）の上方にて發見せられた氷斧（ピッケル）をめぐつて幾多の議論が戰はされてゐることは衆知のことであるが、今爰にその概略を再述するのも興味あることであらう。その氷斧は東北尾根の稜線下約六〇呎、First Step（以下F・Sと略記す）の東方約二五〇碼の地點に於て見出され、その時の狀態はレッヂとかクラックとかの何れによつても支へられず、只僅かの摩擦によつてスラブの上に横たはつてゐたのである。此の氷斧の位置せる地點が風に對して全く吹きつさらしであつたにも關はらず、長いこと此處に殘つてゐたことは實に驚く可きである。と云ふのはエヴエレストに於て經驗せらるゝ風は時速百哩を越ゆることがあるからである。乍然かゝる迅速なる風は到底スラブの表面近く迄接近し得ることはなく、又氷斧が發見された場所も山側の地勢形狀から、かゝる猛烈な速度の風には決して見舞はれないことも首肯し得る處である。それならばどうして氷斧は此處に殘されたか？ 之に對しては次の推定が既に與へられてゐる。一九二四年の遠征時に岩場を經て頂上へ向ふマロリーとアーヴインにとつて、おそらく此の氷斧が邪魔になつたので彼等の中の何れかゞ故意に此處へ殘していつたものであらう。（乍然この推定に對して私は左袒することが出來ない。）エヴエレストの二七、〇〇〇呎以上迄登つたことのある者は誰でも、登攀に際して氷斧の絶對に必要なことを認めてゐる。それはスラブをトラヴアースする際に有効な支持者となるのみならず、又雪の點綴（patches）を横切るに缺く可からざるものでもある。若しマロリーとアーヴインとが尾根を登つたとしたならば、無數の雪の點綴を横切らねばならなかつた筈である。一方フアイナル・ピラミッドの東北面に於ては數百呎の高さある雪斜面がある。この雪斜面は、Second Step（以下S・Sと略記す）を越えてフアイナル・ピラミッドに近づく登攀者にとつて困難に見えるトラヴアースによつてのみ達せられるゝ岩場の部分よりも、頂上へ向ふより早い且より樂なルートであるに相違ない。最後に東北尾根の終結部分即ちエヴエレストの頂稜の如きは約二百碼の長さなる雪と岩の狹稜から成つて居り、氷斧なしにこれをトラヴアースすることは如何なる登山者と雖も夢想だにしないだらう。又万一 Norton's

route が採られたとせば、氷斧は前の諸場合よりも遙かに必要であらう。私は堅雪の部分を横切り、大クーロアールを横切るに數多くのステップを切らねばならなかつた。假に私が小クーロアール迄到達したとしても氷斧は前全樣に必要なものであつたらう。且又登攀者が頂上へ進む途次、登行し横切るであらう北面に於ては、雪の大いなる點綴が見られるのである。雪面を横切る時の氷斧の有効性からしばらく離れて考へてみても、かの「黃帶」yellow band) ——約二七、〇〇〇呎より始まる顯著なる地帶——に於る外側に傾斜せるレッヂ上にて、何等氷斧の飲點を見出すことは出來ない。以上の如き點から考へて、マロリーの如き卓越せる登山者が登頂に際してかくも力强き援助者たる氷斧を、故意に放棄していつたとは考へられないのである。

それならばこの氷斧は偶然のはずみで落つことされたのであらうか？ 若し然りとせば、かの二人の中誰かがこの氷斧を、それが發見された地點と東北尾根の稜線との間の何處かで落したことゝなり、少し下つてそれを見出すことは甚だ簡單なことであつたらう。(故にこの論にも首肯し難い。)

最も傾聽に値する推論は、この氷斧がスリップの事實を明示する、と云ふものである。この地點に於る登攀は比較的容易であるが、然も登攀者にして一度スリップせんか、彼は恐らく自分自身を喰止めることは出來ないであらう。且彼の背中に在る酸素吸入器の重みによつて全く止まる機會を失するであらう。酸素吸入器は慘事の第一の原因であつたと云つてもいゝ。何故ならば、黃帶の比較的容易なスラブの上に於てすら、亂れのないバランスが缺く可からざるものであるから。

マロリーとアーヴインの二人が登山綱を結び合つてゐたことも亦想像に難くない。マロリーか彼よりも經驗少なきアーヴインを綱に結んでやることは、それがたとへスリップの發生によつて後者を充分に確保することが出來ないのを知つてゐたにしても、尙彼の義務であると考へてゐたであらう。この事から綱を結び合つてゐた事はまづ疑ふ處がない。彼等二人は東北尾根の崩壞せる且おそらくは非常に苦しい頂稜へ到るに先立つて、かのスラブをトラヴアースしつゝある時、彼等の中の何れかゞスリップしたのであらう。スリップしなかつた方の者は本能的に氷斧を取り落したか若しくはそれを下において、兩手で綱を握り仲間の滑落を止めるに全力を盡した。然も彼はそれを喰止めることが出來ずに綱に引張られて落ちて了つたのであらう。之は乍然決して抽象論ではない。と云ふのは一九三四年のこと、私は二人のオクスフオードの學生の死體搜査の爲、モン・ブランの南面にガイドの一パーティと行を共にしたことがある。此の時アクシデントに就いて最初に吾々の得た暗示は、スリップの事實を明示する一本の氷斧を發見した事である。然もそのスリップは、エヴエレストにて見出された、かの氷斧があつた場所よりも決して困難でない岩場にて惹起されたものである。セコンド・マンは彼の氷斧を放擲してリーダーを支へようとしたが駄目であつた。そして彼も亦引きづられて墜落して了つたものと推定せらるゝ。

○山岳部圖書調査

昭和十一年一月——昭和十二年十二月の期間内に寄贈を受け又購入せし圖書を記してをきます。

寄贈之部

（括弧内は寄贈者名、特に寄贈者名を記せざるものは發行者よりの寄贈。）

F.S.Smythe: Climbs and Ski runs（昭和十一年卒業部員寄贈）、A. M. Mummery: My Climbs in the Alps & Caucasus（昭和十二年卒業部員寄贈）、P. Guiton: De La Meiji au Viso; R. Tissot: Au Mont-Blanc; 他に歐洲アルプス地圖二幅（常盤敏太講師寄贈）、黑田初子—冬期登山の食物、京城帝大山岳部—積雪期漢拏山登山記、パウル・パウエル著（慶應山岳部譯）—ウム・デン・カンチ、ウイムパー著—アルプス登攀記上下（昭和十二年卒業部員寄贈）、菰野菊、好日山莊—カタログ（登山の手引）、明大山岳部—爐邊六輯、靜高山岳部—紫岳六號七號、武藏山岳會—山籟一號、京大スキー部—やまなみ一號、慶應山岳部—登高行九號十號、立大山岳部報八號、大阪商大山岳部—雪線十三號、農大山岳部報告二號、松屋山岳會—年報五號、慈恵山岳部—ヨッホ三號、法政山岳部—山想四號、東京齒醫山岳部—杖痕五號、北大山岳部々報五號、登山とスキー昭和十一年八月號（吉澤一郎氏寄贈）山とスキー十號より卅號迄揃（增山清太郎氏寄贈）、山を行く創刊號、ケルン四五號（望月達夫寄贈）、丸善山岳部—嶺六年（吉澤一郎氏寄贈）、ケルン四九號。

尙此の他に木村惠吉郎部長より古い山岳を約卅册位寄贈して戴きました。此の整理と製本とは今後の部員諸君に願ひます。

購入之部

F.S.Smythe: Kangchenjunga Adventure; Mountain Essay; 辻村伊助著—スイス日記、山岳講座八册揃、關西岳聯報告七號、アルピニズム一號—六號（製本濟）、登山とスキー七號—十五號（製本濟）、山と溪谷三五號—四六號。

其他日本山岳會よりのもの。山岳三十年二號—三十二年一號（四册）、日本山岳會報五二號—七一號、山岳遭難救助機關參考資料、山岳語彙採集帖。

以上

（昭和十三年二月二十八日　望月達夫調査）

記　錄

○野澤（一月三日—五日）　中川孫一

毎日吹雪で毛無へも行かれなかつた。

○谷川（一月十六日）　中川孫一

會社の初心者中心のスキー行だつたので保土野澤ゲレンデで一日暮した、狹いが雪質はよい。今倉山の附近も藪を刈つて好ゲレンデとしたさうだし、其北の鞍部を越えて大穴へ降るツーアルートも出來たさうだ。

○逢峠（一月三十日）　中川孫一

武能小屋附近は實に氣分がいゝ。今度もパーティと天候の關係で白樺小屋跡（架空線見張小屋）迄登つて引返した。此邊から見た七つ小屋の大斜面はそゞろにスキー欲をそゝつた。

○那須（二月十三日）　中川孫一

寡雪、強風、快晴と三拍子揃つて、さんざんスキーになつてしまつた、宿のスキー客に對する設備（待遇ではない）は甚だ貧弱。猛省を要する。それからバスの後部に積んだスキーは物凄い塵スキーになるから、夢ワックスを汽車中から塗りこんではならぬ。見事な集塵裝置となること請合である。

○谷川岳（二月廿七日）　中川孫一

西黒澤を往復した。二、三日降り續いた後の稱に見る無風快晴に勇躍出發したが、蛇門瀧の少し上から蜿蜒約一キロ、夏路の涸澤の附近に及ぶ表層雪崩のデブリに先づ心膽を寒からしめる。熊穴澤は思つたよりはるかになるい、そして快適な澤だ。土合の小屋から二時間半で、一、五二五米獨標附近の尾根に立つ。眺望絶佳遠く富士の秀峯を望む。十一時出發、登頂を志したが、約百米程登ると俄然激しいウインドクラストとなりスキー靴では稍不安を感じたのと次第に風が募つてきて猛烈な雪煙が舞ひ始め、パーティ中に一人自信のないのが居つたので、此地點から引返した。粉雪の熊穴澤の滑降は快適無比登高一時間の苦闘を十分でブツ飛ばした。蓋し、今シーズン中の白眉。涸澤から下はデブリを避けて右岸の粉雪中を直滑降でゆく。トンネル上の原つばまで來ると春光燦々、もう春スキーの氣分が漲つてゐた。

註、此日保土野澤から谷川を志した厚生省の一行は雪崩に襲はれ三名埋沒したのである。

○横津スキー行（二月廿七日）　林俊介

七飯驛（九・〇〇）—横津日魯ヒュッテ（一一・三〇）—七飯スキー場（二・〇〇—三・三〇）—七飯驛

途中から吹雪き猛烈なため横津岳は極められなかつた。

○ニセコアンヌプリ行　林俊介

三月十三日（晴）倶知安（前五・三〇）—峠（九・〇〇）—ニセコアンヌプリ山の家（前九・二〇）泊

三月十四日（吹雪）山の家（八・三〇）—ニセコ中腹（九・一五）—紅葉谷温泉（一〇・〇〇—后三・〇〇）—昆布（四・〇〇）

粉雪をひとり樂しむ。頂上へは行かなかつた。

關西近藤氏御榮轉祝賀會

二月一日　於　堂島ふじゐ

出席者　近藤氏、五十嵐氏、松木氏、岡田氏、中島氏。

堂島ふじゐと云ふのは中川氏冬季に於ける御定宿で旅舘經營方々料理もやつてゐる落ついた料理屋です。關西例會は時々こゝでやることになつてゐます。

この日近藤氏には御多忙中にも拘らず御會談下さつて御禮申上ます。

同氏から例の調子で會員現役連中の消息を聞き社會談に續き手相談が始まり大盛會後十時半閉會。（中島記）

編輯後記

第三號を御送り致します。

冬來りなば春亦遠からじと申す中に、早や暖い櫻の頃となりました。現役中から古豪連五騎脊廣の初着と相成りまして打出でます面々は、望月・小谷部・森脇・小林・和田の諸氏。會員數もこれで五十三を數えます。（柿原記）